



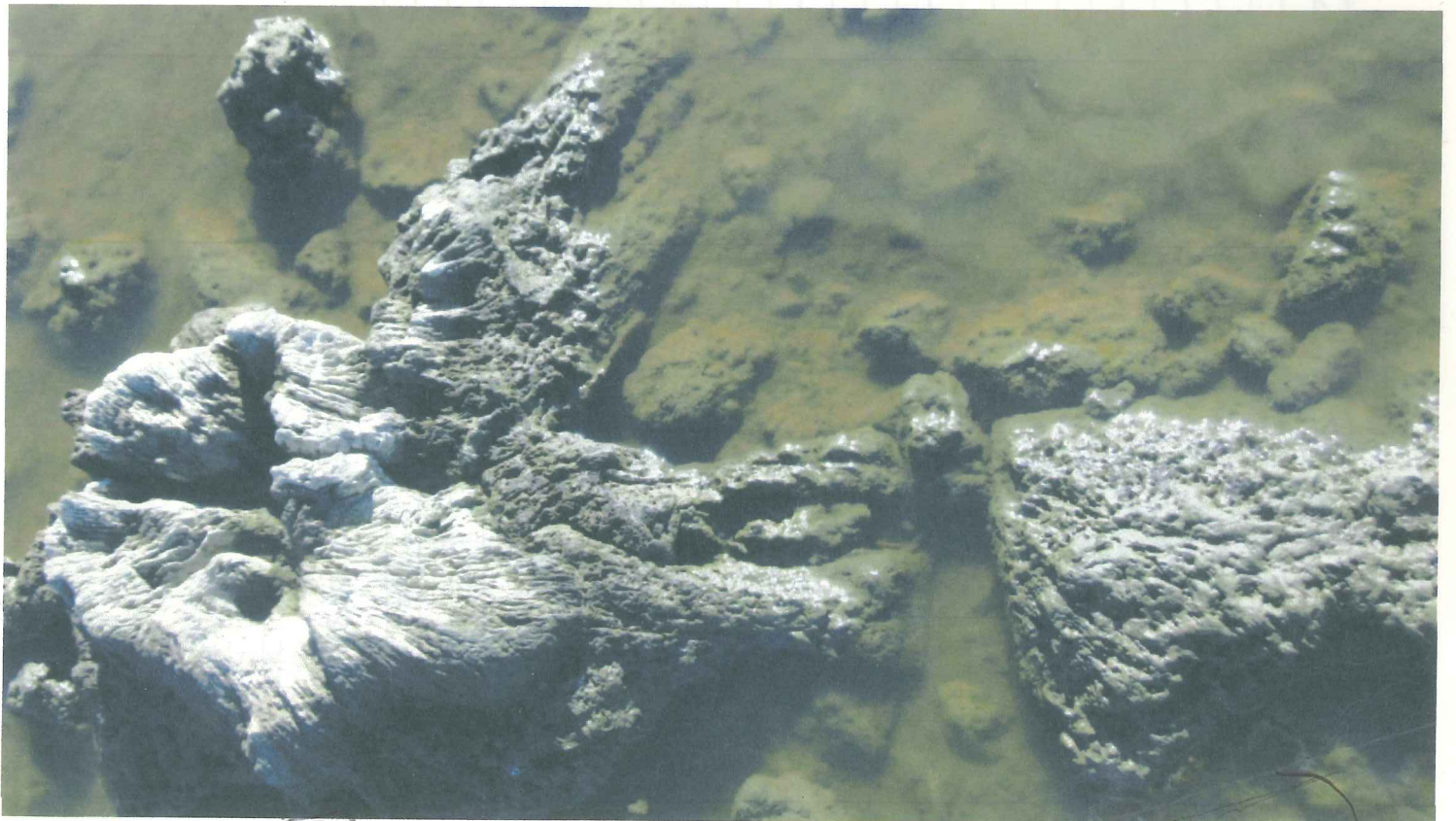
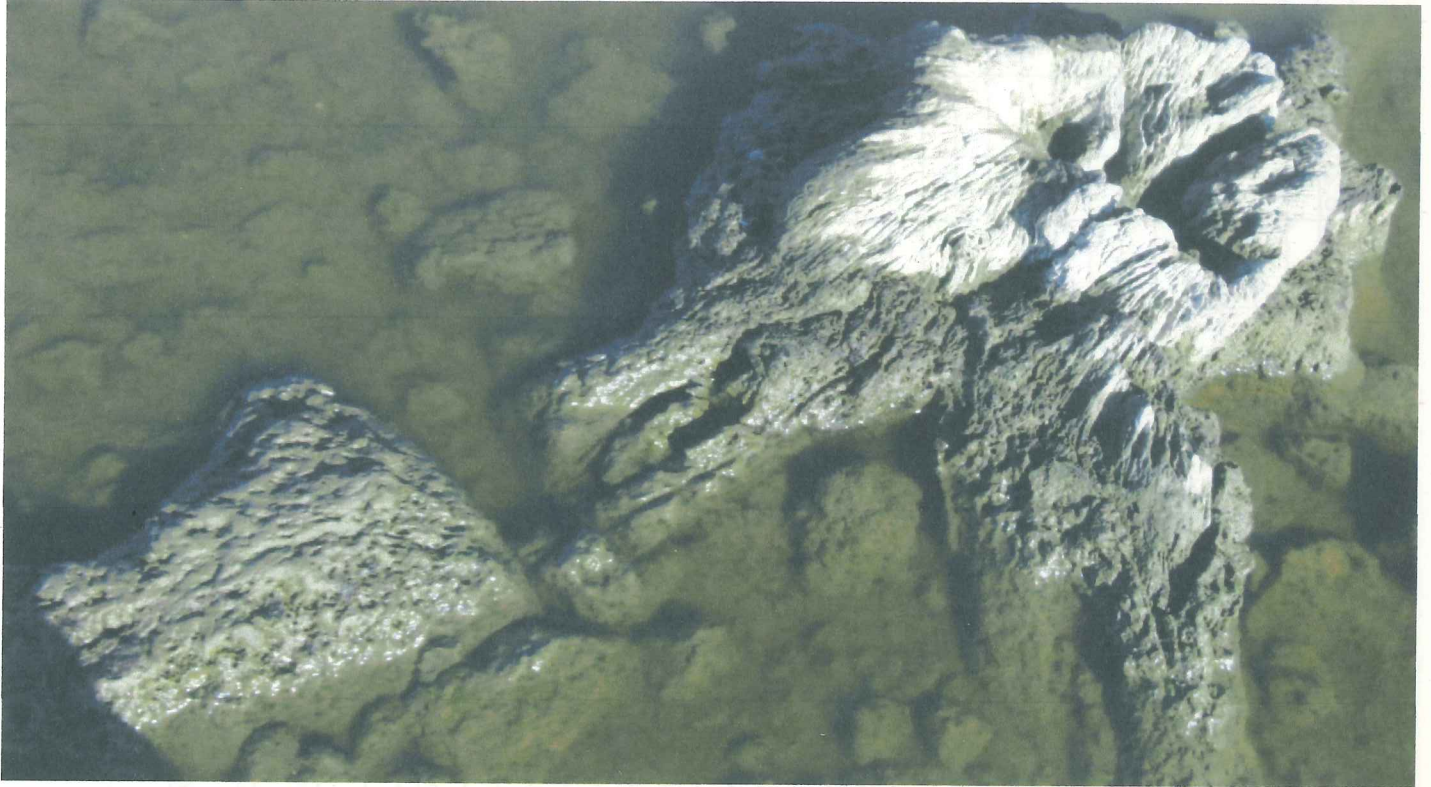
大仏 鑄造 造る計画

館林双書 第七卷より

多々良沼と日向村には 伝説が、残っております。時は 万壽 2 年(1025)の頃、宝日向と その 一族が来て、沼の北岸に居を かまえ 沼の水質が鑄物に適するとの事で 踏鞴をすえて、釜を造ったので 多々良と・日向・の 地名が 起こり また 荒地を開墾して 新田を造り その名も残っております。(新田) 元龜元年 (1570)頃 戸数 7 戸で宝日向の子孫は 他に 移って 行かれたとのことで御座います。おそらく 長い年の末 お仕事の中で、燃料が、無くなり他に 移って行かれたのではないかと思います。まず 鉄を精製するには、①に 燃料 ②に 水質良く ③ 粘度 (風化作用を受けた二次鉱物粒子性をもつ 物) ④に砂鉄が あり、豊富な物に恵まれた場所

※ 観光客から聞いた話しによると 筑波山の北の方にも カナクソの 出土の地があるとの事でもしかして思うに 其方に 移られたとも考えられます。

万寿2年1,025年 宝日向とその一族が ^{たたら}踏鞴を使い
製鉄が行われた 鉄くず カナクソの捨て場に目印
とされて植えた柳の大木と思われる 1,000年の歴史
炭の姿で観光客の目を引いております沼の北岸・船着場



これは多々良沼の南岸に西風で打ち上げられた砂から採取した砂鉄です、私も多々良沼の砂に多量に含まれているとは予想外でした多々良の（踏鞴）名の発祥の歴史から出てくる宝日向と一族が1025年～1570年545年間続いた製鉄が物語っております。私が思うにこんなに砂鉄があるのに545年の間に製鉄に使う燃料が無くなり先祖が待つ今の佐野市天明町に戻ったのではと推定されます。多々良沼の歴史を辿って見るに多々良の製鉄は天慶2年（939）藤原秀郷が平将門との戦いを前にして武器を作る為に河内丹南郡から5人の鑄物師（鉄物師と銅物師）を招き金屋寺岡（足利）に住ませたともある。（940）天慶の乱に勝利し（尾嶋天明衆）（嶋田天明衆）は平和になり国宝級の作品作りに励んだのではと思う。5人衆の一人鉄物師正田又右尉門守の子孫

正田治郎尉門さんと撮影

佐野市天明町の自宅に

平成25年1月31日 荒孫



多々良沼公園整備事業にともない、平成14年～15年にかけて松沼遺跡の発掘調査はつくつちようさが行われあきらかになり、報告書がまとまりました。多々良沼の歴史は古く、今からさかのぼる事12万年以上前、この地を川が流れておりその窪地くぼちに水がたまったものとも、言われております。沼の東側には背状せじょうの高台たかだいが南北につながり、赤松林が広がっています。これは、日本最古で、最大のないりくこさきゅう（内陸古砂丘）の起源きげんは当時の川が運んだ砂であるとも言われております。また、伝説によれば今から千年前の万寿2年（1,025年）場所が製鉄に適するとして宝日向なる者が、この地に来て、踏鞴たたらと言う道具を使い製鉄を始めたと言われています。踏鞴製鉄には、大量の炭を作る燃料が必要で、炭焼釜の発見は、タタラとヒナタの地名存在を裏づける大発見です。実際に多々良沼栈橋の沼の水中に製鉄（タマハガネ）（ケラ）を取った屑くず、カナクソが計りきれない程、眠っております。多々良沼は植物の宝庫でもありました。明治38年（1,805）この地で発見されたムジナモは、大正9年（1,920）国の天然記念物として、指定され、その姿は昭和26年頃まで、見られました、そのほかタタラカンガレイと呼ばれる多々良の名前の付いた水生植物の発見などもあります。